

国境の向こうに帰る日のために

ビルマ難民とともに生きる日本人・カレン人夫婦

国軍に追われ隣国タイに逃れた難民に私財をなげうって教育をしている日本人がいる。現政権に徹底的に弾圧されているカレン人の苦境を自ら解決する能力を育てるためだ。政府レベルとは質の違う民間支援を現地から報告する。

近藤雄生

カレン人のスウィートは幼いころ、「悪いことをするとニホンジンがやつてくるぞ」とよく言われた。ある時彼女はこう聞き返す。

「ニホンジンって何？ 動物？ それとも人間？」

それが人間なのだとかると、それなら別に怖くないわ、とスウィートは思ったものだった。そしていつしか、スウィートはそんなニホンジンと結婚することになった。母親は、「ついにニホンジンに娘を取られてしまったよ」と笑い、そのときスウィートはこのうえなく幸せだった。そのニホンジン、東輝信とスウィートはいま、タイ・ビルマ（ミャンマー）国境のタイ側の町メーソットで暮らしている。リビングとキッチンその他に部屋が二つ半ほどの彼らの家は、二人での新婚生活なら十分な広さだ。だが彼らはそこに、子どもでも親戚でもない一〇人ほどのカレン人の若者を住まわせている。もちろん二人だけの新婚生活を満喫したいと思うときもある。しかし、

難民キャンプから来たその若者たちを通じて、難民たちに「希望」を与えるために、東とスウィートは生活のすべてをかけることに決めたのだ。どこの団体の援助もなく、若者たちからも費用を取らない。それはまさに、私財をなげうっての活動だった。

悲運を嘆くだけでは解決しない

カレン人の苦境は決していまに始まったことではない。多民族国家ビルマの中で、彼らが「民族解放」を目指してビルマ国軍と戦い始めた一九四九年から、すでに五五年。同様な抵抗闘争を行ってきたいくつもの民族が軍事政権の前に停戦を余儀なくされるなかで、カレン民族同盟（KNU）は最大の反政府武装勢力として抵抗を続けてきた。

しかし軍政との圧倒的な資金や兵力の差、またKNU自身の弱体化もあり、カレン人は苦しい戦いを強いられてきた。戦闘での犠牲者に加え、多くの一般民衆が生活の場を奪われ

た。その結果、国境を越えてタイに逃げてきた難民は約一二万人、ビルマ国内を逃げまどう「国内避難民」は一〇〇万人ともいわれる。ようやく昨年末からKNUと軍事政権は停戦へ向けて交渉を始めたものの、その先行きはまだ見えせず、カレンの人々の厳しい事情は変わっていない。スウィート自身も、そんな難民の一人だった。八歳の時に村をビルマ国軍に襲撃され、タイへと逃れてきてからすでに二〇年以上が経つ。

どんな苦しい生活を強いられるもカレン人には戦うしかないのだという気持ち。八九年に父親が戦死したときもそれほど変わらなかった。しかし九七年、一四年ほど住み続けたタイの集落さえもが襲撃を受けたときに、スウィートは戦い合うことの無意味さを痛感する。戦うことで全てを奪われた。このままではカレン人は決して救われない。強くそう思い、「平和」という言葉の意味が初めて身に沁みだした。漠然とだが膨らみ続けたそんな思

国境付近を南北に走る幹線道路沿いに広がるメーラ難民キャンプ。数キロにわたってびっしりと家が並ぶこのキャンプにはカレン人を中心に3万3000人ほど(2003年国連難民高等弁務官事務所調べ)が暮らす。右側の切り立った崖の向こうにビルマがある。



いに形を与えたのが、東輝信だった。アメリカのコロンビア大学で民主化や民族主義の研究をしていた東と二〇〇〇年に難民キャンプで出会い、スウィートは彼のアイディアに夢中になった。彼は私の情熱を現実に変えてくれるかもしれない、と……。キャンプをたびたび訪れていた東には、カレン人の苦境はカレン人自身にしか変えられないという思いがあった。もちろん同情すべき点はた

くさんある。しかし、自らの悲運を嘆き、助けを待っているだけでは何も解決しない。彼ら自身が現状を理解し、自ら道を切り開かなくてはならないのだと、彼は強く感じていた。

そしてそのためには、彼ら自身が交渉能力や問題解決能力を身につけ、また民主主義や民族主義を理解する必要があり、それを学ぶ場を自分たちが作ろうと東は考えたのだ。

○二年、そんな二人の手で「PEC (Peace Education Center)」が立ち上がった。場所も資金もない。自分たちの貯金がいままで持つかも知れない。しかしそんなことよりも、とにかく二人は動き出した。

「カレンのために、学びたい」

PECの「メンバー」たちは、難民キャンプで選抜される。英語の集中講座や面接によって、考える力ややり抜く力があると見込んだ者を自

宅に住ませながら、東が中心となつて教育している。

私が訪れたとき、メンバーたちはまだ英語力を高めることに必死だった。彼らはキャンプで教育を受けているとはいえず、もともと英語が達者なわけではない。だが、一緒に授業に参加し、彼らと日々話をしていて、そのレベルの高さに驚かされた。それは、昨年PECを卒業した一人がカナダのトロント大学へ進むことになったことから窺えるが、なによりも彼らは学ぶことの喜びと必要性を実感し、よく勉強しているのだ。

だが東は、メンバーの誰もが自分の意図を十分理解しているとは考えていない。確かに、みながみな民主主義などについて学びたいという明確な意識があるわけではなさそうだった。

「でも、それでいいんです。当然なんです。ここで学ぶ中で、知識や考

えることの価値をわかってもらえればいい。それがきつとカレンのコミュニティ全体にとつて大きな力になるはずなんです」

そんな東の言葉は、単なる期待ではない。メンバーの誰もがPECの環境をなんとか将来に活かそうと必死なことはよく伝わってきたし、彼らのほとんどが私にこう言ったのだ。「いつかは国境の向こうの故郷カレン州で、カレン人のために、ここで学んだことを活かしたいんです」

必要なのは「希望」

私は一度、難民キャンプを訪れた。幹線道路沿いに数キロにわたつて家が建ち並ぶその空間で、難民たちは穏やかに暮らしていた。

キャンプには海外からの支援も多く、難民たちの生活はそれほど悲惨なわけではない。食べ物配られ、医療も一〇年間の教育も受けられる。生きるために必要なものはとてりあえずある。「しかし」と東は言う。

「ここには希望がないんです」生きることでなくても、市民権もキャンプを出る自由もない。その状態で前向きな将来を考えることは難しい。しかし、それはきつと自分たちの手で変えられるということ。東たちは彼らに信じてほしいのだ。

「いまの活動を一〇年続けられ、きつと変化が生まれてくると思っています。カレンのコミュニティは決して大き

なものではありません。一〇〇人、二〇〇人の力によって、変えていく規模だと思っんです」

東のカレン人に対する見方は決して甘くない。むしろ厳しく、現実的だ。しかしだからこそ、そこに彼の並々ならぬ情熱が感じられるのだ。

*

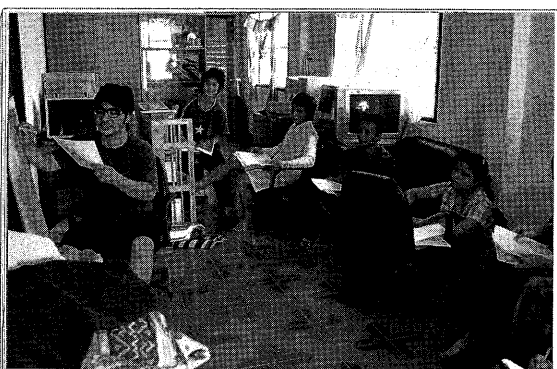
朝六時。東は買い物当番を後ろに乗せてマーケットへとバイクを走らす。そして八時半から午前の授業。暑くなる午後は休み、夜の授業がその後に続く。タイの市民権がないため自由に歩けないメンバーたちは、一日の大部分を家の中で過ごす。

一方スウィートは、昼間はあるNGOで働き、夜は隣接する診療所でほかの難民たちにボランティアで英語を教えるなど忙しい。疲れて帰ってきたスウィートに、東がのんびりと声をかける。その傍らでは、メンバーたちが談笑したり、その日の復習に励んだりしている。

「援助」という気持ちでは続けられません。彼らの成長を見ているのが楽しいんです」東のその言葉どおり、一つの大家族のように生きる彼らを日々見ているうちに、いつか彼らと、一本の河の向こうに広がる故郷カレン州で会ってみたい、と私は思うようになっていた。

(敬称略)

こんどう ゆうき・ルポライター。



上/授業は、リビング兼通路である細長い空間で行なう。予備校教師の経験もある東さん(左)は、英語を教える場合も、ただ英語だけではなく、メンバーたちが知的に満足できるような教材を選ぶことに気をを使う。



左/スウィートさん(左)が以前住んでいた難民たちの集落で。ビルマ国軍らによる一度ならぬ襲撃によっていまではぼつぼつと家が残るだけとなった。右の女性はいまもここに暮らしている。写真撮影/筆者 PECの連絡先(日本語可) sweetmoorah@yahoo.com